

S. Ashina

前期：キリスト教と近代的知——宗教哲学構想

オリエンテーション——「キリスト教と近代社会の諸問題」

1. 前年度のまとめ——象徴論・言語論
2. 近代/ポスト近代と宗教哲学構想

後期：キリスト教と社会理論——経済と環境

3. 「神」の現在
4. 聖書から経済・政治・社会
5. キリスト教と経済学説
 - 5-1：ウェーバー・テーゼをめぐって
 - 5-2：近代経済学と神学——アダム・スミス
 - 5-3：キリスト教・資本主義・社会主義——賀川豊彦

< Exkurs >

1. 思想史研究の可能性——近代日本キリスト教思想研究から 1/13
2. 脳神経科学と宗教 1/20

6. キリスト教と政治理論 → 2012年度へ
 - 6-1：現代思想のパウロ論
 - 6-2：イデオロギーとユートピア 1
 - 6-3：イデオロギーとユートピア 2

<前回>近代経済学と神学——アダム・スミス**<アダム・スミス問題>**

1. 「初期のスミスを代表する『道徳感情の理論』にみられる道徳意識に関する議論と、『国富論』における「利己心」を前提とする経済学とは、どのような関係に立つのかという疑問が生まれ、初期のスミスと後期のスミスの統一的理解にかかわるあの「アダム・スミス問題」が発生することになる」（梅津、206）

(1) 近代社会科学とキリスト教

3. 「キリスト教に関する知識がヨーロッパ近代思想の理解に不可欠なことは、改めて指摘するまでもない周知の事柄である。しかし、近代思想とキリスト教との具体的関係については、キリスト教の教義や神学思想の理解が容易でなく、下手に手を出すと泥沼化するおそれも多いことから、一般には自明の理として前提するにとどめ、本格的接近は避けて通るのが、これまでの内外の、とりわけ日本の研究の大勢であったといえるであろう。日本の人文・社会科学の深化を妨げていた壁の一つがそこにあったことは明かである」（田中、3）

4. 「カルヴァン主義的神観念」、「神の予定は恣意的であるため、人間には理解しえなくても、神が第一起動因として予定した世界の法則は原因⇒結果の自然法則の設定者としての科学的な神観念に従って、因果論的に理解されうるからである。予定説の論理に象徴されるカルヴァン主義的神観念と自然宗教的な第一原因としての神観念とが結びつく契機は

そこにあるが」(8)

(2) アダム・スミスの自然神学

6. 「正義＝法の原理論としての『感情論』の倫理学は」「グラスゴウ大学におけるスミスの「道徳哲学」講義の第一部門をなしていた「自然神学」講義を前提とするものとして、その基礎の上に展開されたものであった」、「神の存在と属性の証明と、宗教の根拠をなしている人間精神の諸原理の考察」を主題」(159)、「自然の構造」分析が同感感情の心理分析に基づいて行われている点」「同感原理に基づく人間の自然の構造分析」、「スミスは、「富と徳性」の合致の可能性を「自然の狡知」(工夫・計略)という神学思想によって説明していた」(161)

7. 「偶然の効用」(162)、「人間が自然の必然法則の支配下でありながら、それが隠されていて見えないため、自然にだまされて」、「富と地位の快樂」を追求する」「ことが必然法則実現につながると考えていた」(164)

8. 「『感情論』の直接の主題は」「こうした倫理と法の根本大前提としての神法の支配ないし神の正義の論理を前提化することによって、「神の正義」論とは異なる地上の正義論を確立する点にあった」、「スミスは、「自然の不可変の諸法」(自然の必然法則)とその創造者としての「神の正義」を認めながらも、それが「はっきり認知」されえぬため、自らの自然の感情のままに」「人間が従うべき地上の倫理の確立を『感情論』の直接の主題とした」(166)

9. 「人間の「道徳感情(moral sentiments)」そのものをデザイン(目的因)の有効化因(作用因)としてとらえている点」(168)、「自然的感情」「としてわれわれの道徳能力の活動を一人の感情的交流・交通原理としての同感に求め、その上に全体系を展開した」、「コミュニケーション原理としての「同感」概念の成立」、「他人との感情的交流なしには生きられない人間の同感感情の自然の働きの結果」(169)

10. 「経験原理に立脚する倫理学」、「想像的同感」、「想像上の立場の交換」の論理、「観察者」視点を意識的に対自化した」(171)、「内なる人」「胸中の法廷」「良心」(172)

(3) 経済学とキリスト教思想

11. 「『道徳感情論』の「みえない手」は」「自然の必然法則、ないしその起動因としての目的因を意味するものであった。スミスは、人間にはそれがみえず、みえると行動しなくなるため、必然法則がみえないままに、自由に手段の適合性を追求することが、結果的には目的期成因(efficient causes)として必然法則実現機能を果たすことになる、自由(作用)⇒必然(目的)のプロセスを「みえない手に導かれて」という言葉で表現したのである」、「みえない手の働きの表現としての作用因(人間)の活動の経験的観察によるみえない手＝自然の「隠された統合原因」の発見を主題化する」(263)

12. 「「摂理樂觀主義」は、こうした神学的必然論とそれを前提とした上述の論理に立脚するものであった」、「『感情論』初版が、厳密な意味では徳性論ではなく、ありのままの人間の利己心とパーシャリティを前提として上で、ありのままの自然の欲求に生きる人間相互間の社会関係の規制原理としての第三者の立場の論理と公平な観察者の同感を唯一の原理とするミニマリスト・モラルの確立を主題とした」(266)

13. 「『国富論』も、『感情論』と同じ作用⇒目的の論理に立脚するものとして、経済過程

S. Ashina

における作用⇒目的の自然法の解明を通して、その実現阻害条件を排除することを基本主題とするものであった。スミスが、『国富論』で、各人の自由な利己心追求活動がその意図しない帰結として社会全体の富の極大化とその適正配分につながる経済世界の自然法則を明らかにする一方、そうした自由（作用）⇒必然（目的）の自然法則の貫徹・実現を妨げる重商主義政策や、それと結びついた特権や独占を批判した根拠はそこにある」（266）

14. 「スミスは、『感情論』から『法学講義』をへて、『国富論』に至る過程で、経済社会における作用⇒目的のデザインを論証する経済理論体系の成熟と、それに対する現実認識の進展に伴って、『感情論』の論理の根幹をなしていた作用（自由）⇒目的（必然）の論理の根幹をなす目的因仮説をひっこめ、作用因としての人間の構成する経済過程のそれ自体としての経験的分析・叙述に専念することになったのである。みえない手が、『国富論』では神秘性を感じさせず、文字通り比喩的表現に転化している理由はそこにある」、「『国富論』体系の完成とともに、建物の足場ないし枠組をなしていた神学思想（目的因仮説）は全面的に取り払われることになったのである」（267）

↓

ウェーバー・テーゼにおける、「ステップ 2、3、4」の展開として、アダム・スミス問題を論じること。

5. キリスト教と経済学説

5-3: キリスト教・資本主義・社会主義

——賀川豊彦

(1) キリスト教と社会主義

0. 聖書と社会教説、資本主義か社会主義か。

・トレルチ『社会教説』

「キリスト教の全体的な基本的方向を社会問題との連関において理解しようとする場合、決定的なのは、イエスの説教と新しい宗教教団の形成とは決して社会運動の創造ではないということ」、「中心にあるのは魂の救い、唯一神信仰、死後の生活、純粋な礼拝、正しい共同体組織、[キリスト教信仰の]実践的証明、神聖性に関するきびしい根本原則の問題」（36）、「神の国というのは至るところでまず第一に神によって支配される世界の倫理的並びに宗教的な理想状態である。この神によって支配される世界においては純内面生活のあらゆる真の価値が本当に認められ、そして力を得るのである」（37）

「[キリスト教の]一切のものの根底にあるイエスの説教に第一に《社会的》問題設定を持ち込むということはそもそも誤りである。イエスの説教は明らかに純粋に宗教的な説教であり、そして神について並びに人間に関する神の意志についての特定の思想から発したのであった。宗教的な生の価値が彼にとって唯一の財産なのである」、「政治的並びに社会的解体は古い現世的思想をここに[後期ユダヤ教]においても解体し、内的なるもの或いは超越的なるものへの転向を暗示した」、「しかしこの宗教思想に社会学的問題設定を持ちこむこと、つまりこの宗教思想から個人と共同体の関係がどのように形成されるのか、ことごとくの大いなる思想に接続する社会学的構造をこの宗教思想からどのようにして掲載されるのか、を問うこと、こういうことは大いに許されうる」（58）

- ・開かれた食卓と愛の共産主義、古代資本主義（ローマ帝国批判）・ヨハネ黙示録
- 1. 社会主義：近代の歴史状況を端的に反映した政治思想である。
 - 源流は近代以前に遡る。社会主義という用語の起源——一七八九年にイタリア語
 - 社会主義の多義性・曖昧さ、近現代の政治思想における特別な位置
- 2. 「社会主義」：近代——欧米諸国による国民国家モデルと世界覇権の形成——以降に登場した広範な諸思想・諸運動を含む理論群に対して用いられる包括概念。
 - 共産主義に限定されない広い意味における社会主義
 - 近代の自由主義的資本主義的な社会秩序の進展によって発生した諸矛盾（貧困、劣悪な労働環境など）を社会変革や社会的共同性・相互性によって克服することを志向し、人間的生の全体における自由と平等（政治的平等から経済的平等への拡張を含む平等主義）を内容とする道徳的正義と幸福の理念との実現をめざす。
- 3. 理論と実践
 - 近代社会における労働法制定の動向の中から。
 - イギリスにおける全般的団結禁止法（1799年、1800年）
 - 1802年の工場法（ロバート・ビールの工場法。若年徒弟の労働時間を一二時間に制限）となって現れ、1824年の団結禁止法撤廃を経て、八時間労働制の確立——1917年にロシア革命後のソ連で導入され、1919年のILO第一号条約として確立する——。
- 4. イギリスのキリスト教社会主義運動：1848年、J.ラドロー、F.D.モーリス、C.キングスレーらに指導された社会改良運動。信仰に基づき、隣人愛と神の前の平等というキリスト教的理念の社会的実現を目指す。
 - 職能別組合や消費組合などの各種の相互扶助の組合運動、そして労働者教育（隣保館・セツルメント事業、労働者大学）
- 5. イギリスを超えて同時代のアメリカやスイス、ドイツなど。
 - 第二次世界大戦後のフランスの労働司祭運動や解放の神学
- 6. アメリカの社会的キリスト教。1880年代の神学運動
 - 南北戦争後、19世紀後半のアメリカにおける社会矛盾（貧困問題と労働問題）、新しいキリスト教神学建設の要請
- 7. 片山潜らを介して日本におけるキリスト教社会主義
 - 同時期のアメリカの「社会的福音」(social Gospel)
- 8. 明治期の日本キリスト教は近代日本の政治・社会的状況との関わり
 - 自由民権運動への積極的な関与、キリスト教的な戦争論の展開(内村鑑三の非戦論など)、足尾鉍毒問題への取り組み、そして、労働運動・社会運動への先駆的で指導的な関わり
- 9. 「日本の社会主義はキリスト教を一母胎として生まれ、活動してきた。しかしキリスト教界の大勢は社会主義に消極的であり、日露戦争では見解が全く対立した。社会主義者はキリスト教が次第に自分たちと敵対する支配層の側に立ち、それに奉仕する宗教であると断定するようになった。これに応じてキリスト教社会主義といわれる人たちの中に自己分裂が生まれてきたのである。」(土肥、1980、218)
- 10. 近代日本の状況→キリスト教信仰と社会主義思想の両方を保持し続けることの困難
 - 片山潜、石川三四郎、安部磯雄、木下尚江ら

S. Ashina

11. キリスト教社会主義の理想主義が有した、社会的進歩への楽観的見方（楽観的な人間理解と歴史理解）と、過度の心情主義。R. ニーバーの言う「愚かな光の子」
12. 「われわれにとって今日特に関心を唆られるのは、第一次大戦後のティリッヒやニーバーによって提唱されつつあるキリスト教社会主義であって、そこには従来の所謂キリスト教社会主義の福音信仰を逸脱する『社会的福音』の立場と呼ばれる安易な楽天的な内在主義に対する厳しい批判的態度が見られる。そしてそれがバルト神学の超越主義と既往の自由主義的なアングロ・サクソン神学とに対決するという意味をもっている点で注目される。」（武藤、一九五五、二七）
13. 問題は、一九世紀の理想主義の真理契機を生かしつつ、それを乗り越える現実主義とは何か。

<参考文献>

1. 武藤一雄『宗教哲学』日本YMCA同盟出版部、一九五五年。
2. 土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社、一九八〇年。
3. Art."Sozialismus," in: Joachim Ritter und Karlfried Gründer (hrsg.), *Historisches Wörterbuch der Philosophie, Bd.9, (=HWPh.9)* Schwabe & Co, 1998, S.1166-1210
4. ラインホルド・ニーバー『光の子と闇の子—デモクラシーの批判と擁護—』一九四四年。

(2) 賀川豊彦の「友愛の政治経済学」

0. 賀川豊彦『友愛の政治経済学』加山久夫・石部公男訳、日本生活協同組合連合会、2009年。Toyohiko KAGAWA, *Brotherhood Economics*, Harper & Brothers, 1936.
 1. 「序文」
 - ・「今日」「キリスト教の教えが挑戦を受けている時代」、「信条が重要ではないというのではなく」「社会での贖罪愛の適用が必要なのである」、「生産者と消費者との間の溝を兄弟愛をもって架橋しなければならない」、「物質主義的資本主義と物質主義的共産主義は共に放棄されねばならないのである」、「心理的ないし意識的な経済を通して新しい社会秩序に至る新しい道を見出そうと試みた」(17)
 - ・「1936年4月、コールゲイト・ロチェスター神学校のラウシェンブッシュ基金の招きで「キリスト教的友愛と経済再建」という表題のもとに4回にわたって行なった講演」(18)
 2. 「第1章 カオスからの抜け道はあるか」
 - ・「世界は混沌とした状態にある」、「今日の貧困は物の欠乏によるのではなく、豊富さから生じている。物財や機械の過剰生産、過剰な労働や知識層の存在からくる苦しみである」「富はごく一握りの人々の手に集積し、社会の一般大衆は、失業、不安、従属、不信の世界に蹴落とされている」、「レッセ・フェール政策」(19)
 - 「世界の諸問題が」「今では一つであり、一つのユニットとして取り扱われるのでなければならぬ」という認識」(20-21)
 - 「今日のキリスト教会が人間の生活全体を満足させる福音を説いてはいないことを告白しなければならない」、「教会が近代において愛の実践の使命を果たしていたなら、マルク

ス主義が現在の規模にまで拡大するわけはなかったであろう」、「キリスト者は世界的な友愛運動において、愛の有効な行動を展開することによって、この挑戦に対応していかなければならない」(21)

・「禁教の理由は、さらに4世紀前、イエズス会の宣教師が来日した際」、「政府は3世紀以上にわたりキリスト教にたいして門戸を閉ざしてきたのである。その結果、日本の人々はいまなおキリスト教にたいして著しい偏見を持っている。いわゆるキリスト教国はいまなお東洋諸国を経済的・政治的に侵略しており、私たち東洋人にキリスト教国たいする古来の偏見を呼び覚ましている」(22)

・「消費協同組合、質庫信用組合、学生信用協同組合を組織した」、「これはキリスト教的兄弟愛の実践にほかならない。日本は変わりつつある。過去2年間、私たちは宗教の復興を経験しつつある。すべての宗教に活気があり、人々のあいだに広がっている」、「日本では、キリスト教徒の数は少ないが、キリスト教の影響力は、今日、強くなってきている」
「社会活動家の多くがキリスト者であること」、「キリスト教のハンセン氏病療養所もいくつもある」「日本労働同盟は東京の教会で始まった」(28)

・「唯物論的な共産主義とキリスト教批判に、率直に向き合わねばならない」、「私はこれらの急進的な人々のうち、キリスト者として踏みとどまった、ほとんど唯一の者である。ほとんどの人々はあれこれの理由で教会を離れていった」(30)

「再びキリストへと連れ戻すまで、彼らの期待を満たすような、現代のキリスト教的プログラムのために何が必要なかを学ばなければならない」(31)

・「最近のロシア、ドイツ、英国の労働者政党的政府が、世界を現在のカオスから救い出して、いまや至上命題となっている経済再建を為しとげる力を持っていない、と結論せざるを得なくなった」、「ニュー・ディールの「管理資本主義」」「資本主義は、改善された形であっても、恒久的な社会秩序に属するものではないこと」「資本主義は自由競争の原理に基づいており」、「収奪システム」、「僅かな人々の手中での資本の蓄積」「上流階級ないし有閑階級を産み出す」、「資本の集中とともに、勢力は支配階級に集中する」、「無産の低賃金労働者が大半を占め増え続ける」(32)

「私たちは、唯物論的共産主義も政治的社會主義も達成し得なかった、そして信条主義的キリスト教の力も及びえない、社会の再建、新しい道を、探さなければならないのである」(33)

3. 「第2章 キリストと経済」

「I 主の祈り」

「ある人々は、キリスト教の真の実体は全く宗教的であって、経済生活と何の関係もない、と言う」、「もちろん」「違いはある」、「しかし、キリストはそのような態度をとってはいなかった。彼はしばしば、経済の基本的な事柄を取り扱っている」、「食事」「食卓」「日ごとの糧への祈り」(34)

「「われらの日用の糧を今日も与えたまえ」。これにつづく三つの祈願における「われら」という代名詞は広く人類を意味する。私たちは自分自身のパンのために祈らねばならない。もし日々の生活をなし得ないのであれば、宗教は無意味になる」、「また、自分たちの小さな共同体だけのための祈りであってはいけない」(35)

S. Ashina

「私たちは赦しを、完全な赦しを必要としている」、「経済的な協働をとおしてである」、「兄弟たちが誘惑に陥らないように、環境を変えていかねばならない」、「よい協同組合があるときには、盗みへの欲望がなくなる」、「スウェーデンやデンマーク」、「大都市があると、そこには煙で汚れた文明がある」、「すべてのことが、主の祈りの6項目に含まれている。その中で、キリストは経済について素晴らしい教えを与えてくれているのだ」(36)

「II 価値の7要素」

「客観的世界と絶対的世界のあいだに、自然と神のあいだには、七つのチャンネルがある。生命、労働（またはエネルギー）、変化、成長、選択、秩序（または法則）、目的がそれである。これらはあらゆるタイプの経済に通じる価値の7要素である。キリスト自身が価値のこれらの七つの要素への基本を私たちに示してくれている」(37)

「キリストはここで、経済的価値の基本原理は生命価値をもって始まることを説いている」「身体の経済は、生命を保持するための活動が価値基準となる」「生命の保全のため」、「食物、衣服、住宅の基本的ニーズが」「公衆衛生施設、警察、消防、反戦施策、その他の生命保護のための手段が必要になる」(37)

「肉体労働の価値は生命の保全と密接に結びあっている」(37)、「失業者といえども搾取されてはならず、雇われると時には、生活給が保証されるべきだ、とイエスは主張する（マタイ xx.1-16）」(38)

「変化や交換の価値」、「交換は非常に重要であり、そのため経済はほとんどこれを基礎にして考えられるようになってきた」(38)

「イエスは、銀行に言及し、利潤やそれが生む利息について述べている」(38)、「彼は、この注目すべき成長という価値原理について私たちの意識を呼び覚ます。イエスが指摘しているように、成長の法則は自然の中にある」、「生産の増大は、交換システムをとおしての人類の互助組織によって、量的にも質的にも促進されている」(39)

「変化や成長が容易に行なわれることは、資本主義文化の特徴である。しかし、単なる変化や成長は必ずしも幸福をもたらすものでも、人格の成長に貢献するものでもない」(39-40)、「選択という価値の第5の要素」「選択を対象とする経済が存在してくる」、「選択について」「自己を検証し、自分の心を吟味するように注意をうながしている」、「職業や家業の選択のための効率の経済の可能性」、「社会立法や職業ガイダンスなど、昔の物々交換経済の時代には考えられもしなかったことである」(40)

「商法、銀行法、協同組合法、労働法など、今日の各種の社会経済法規は、これらの法律によって創設される権益と共存し、それらの権益は社会的意識から発現してきたものである」「権益の経済」「ここにおいて、政治と経済は結びあい、勢力と価値の諸活動が複雑に関係しあう」「社会立法の経済」(41)

「目的価値の変化は文化の類型に影響する」、「文化にさまざまな様式が現れる。同じことは宗教の発展についても言える」、「神への奉仕がそのための手段としての〈富〉の追求と両立することを強調した」、「経済生活が、神の目的を成就すべき宗教生活と一致しないとき、その大切な意味を失うと、イエスは述べていたのである」(41)

「これら価値の七つの要素は、私たちが経済システムを検証するさいの基準である。それらは主観的世界から客観的世界に至る七つの通路である」(42)

「Ⅲ 十字架の愛と経済の価値」

「イエスの宗教の偉大さは」「彼の意識が神ご自身のそれと一つであったこと」、「人間のあり得る全てを体現したことであった」、「イエスの十字架は、神の愛と人間の愛の完全な融合を示したものである」「贖罪愛」、「神の視点から捉え、人類を救済する神の責任の重荷を共にしたのである」、「私たちはここに個人的価値運動と社会的価値運動の完全な一致を見出す」、「キリストの贖罪愛は社会全体を救うための個々人の魂の救いを意味する」、「十字架の愛は経済の価値の七つの要素をすべて含む」(42)

「近代資本主義体制は十字架のもつ経済的含意を無視し、それを経済の価値とは無縁の宗教的な事柄にすぎないものとして、十字架を足下に踏んづけてきた」、「神の国のためのキリストの計画」(43)

「ソーマは民族の全体や社会の全体をも意味する」、「十字架を背負う愛が社会経済の原理であると認められるならば、個人の所有権や相続権はすべて神と社会に献げられるものとなり、利潤や収益はすべて神に属するものと解され」、「より大いなる社会愛」(44)

「もしも私たちが神に帰依し、手足を動かすことを拒み、それでいて神は私たちを助けてくださるだろうと信じているとすれば、それは迷信以外の何ものでもない。結局のところ、信仰とは神による可能性を信じることである。この可能性を信じることでそれ自体が人間の活動を要求する」、「神の呼び起こされた愛の結果」(45)

「愛は人間のチャンネルを通して流れ出る神の働きなのである」、「贖罪愛は全体的な意識、即ち神意識から出る。だから、神より来るものである。この愛は、人間の意識のチャンネルをとおして流れ出るが、神の意図に従っている」、「愛の可能性への信仰」、「私たちが私たち自身をとおして神に働いてもらうようにするのでなければ、神ご自身もその可能性を実現することはできない」、「おのれの神信仰が言葉だけの皮相な信仰にとどまる、自己中心的な人たちがいる」、「神の創造の業、とくに人間を愛し得ないなら、その愛は自己矛盾を抱えている」(46)

「行動的に考えなければならない」、「神は愛であるという信仰と知識は、愛の行為においてしか認識され得ないのである」、「愛こそが、七つの価値要素を統合する。愛において、絶対的存在が相対的存在に語りかける」(47)

「プロテスタントは信仰を強調しながら、神の絶対的な力を制限する。他方、カトリックは愛を強調しながら、神の愛に制限を設ける。これらの失敗にもかかわらず」(48)

「Ⅳ パウロの経済価値の観念」

「キリストは神を第1にしたが、そうすることで、経済を無視することはしなかった」、「私たちの経済生活を神中心のものにしていくのでなければならない」(48)

「キリストの死後、宗教的共産生活において実践に移された。パウロの13の書簡を学ぶと、初期の教会が愛他的な労働経済を実践していたことがよく分かる」(49)

「贖罪愛の遺産の継承」「貧しい人々を助け、宗教的協働生活を実践することが至上命令であると考えた」、「宗教生活と社会生活のあいだには何ら矛盾を感じていない」、「信仰が」「抽象的なものであれば」「両者に矛盾を感じるかもしれない」、「私は信仰を信条の事柄とは考えない。宗教生活は神の愛に依拠する生の全体であると私は信じる」(50)

「Ⅴ 贖罪愛と経済革命」

「中世の汚濁や近代資本主義体制の侵入」(51)

S. Ashina

「ローマ法の原理は、世界を救おうとしていた贖罪愛の自覚的生活を押しつぶしながら、機械的な資本主義の支配へと続いてきた」

「今日、多くの教会はその贖罪愛をもっぱら信条的なものとして保持することによって、楽な思いをしようとしている」(52)、「残念ながら、教会組織の大半は、不当利得社会の特権階級に依存している」、「キリスト教会の存在がなぜ脆弱で、現代世界の騒乱になかで教会がなぜ無力なのか、を明らかにする」(53)

4. 「第3章 唯物論的経済観の誤り」

「I 唯物論的経済観の無力性」

「アダム・スミスによる宗教と経済の分離は一時期成功したかに見えた」、「しかし」、「宗教地経済の二つの領域は一緒になり、一体として動くのでなければならない」(54)

「過去の過ち」「それは経済が人間の意識から独立していると想定し、経済学を記述的な科学として取り扱ったことにあった」、「あまりにも自然主義に傾斜したため」

「マルクスは、経済学を自然科学として取り扱うことができると考え、すべて唯物論的決定論で分析できるとする特殊な方法論を擁護したのである」、「この時期、経済学者と同様に、神学者も、経済学は自然科学の領域に入れられるべきだと考えていたのだからである」

「経済行為は、人間の意識の発展レベルとともに変化する、と私は信じる」、「1国の文化はそう容易には説明されない」(55)、「単なる物質生産様式だけに基づいて文化的社会を定義しようとするのは、大きな誤りである」(56)

「II 社会的意識の覚醒」

「人間の精神的な目覚めが発明や発見をとおして、私的所有権や遺産相続や契約権などの概念に基本的・革命的な変化をもたらす」、「プロテスタンティズムは」「資本主義的文化の勃興に道を開いたのである」(56)

「16世紀の契約や相続の概念の基本原則は、大規模な大量生産の利用によってもたらされたカオスのなかで失われ、新たな賃金奴隷階級を創設することとなった」「社会正義の感覚の喪失」(57)

「III 心理的経済」

「自覚的な社会意識は生産と消費という二つの角度から発展してきた。経済心理の動きは、以前には夢想だにできなかった先物買いの操作を考案した」、「まだ存在しない物を取り扱うのである。貨幣の流通は人間の信用意識に依存している」

「唯物史観の概念は、従前の社会を説明するには役立ったかもしれないが、時間を含む心理的経済を取り扱う社会経済的社会の現象を説明するためには役に立たない」、「かくして、唯物論的経済は心理的見解に席を譲っていかねばならない」(59)

「連帯性を欠く民族は株式会社をつくることができない」、「互助の意識が発展していない社会では、時間を含む交換のすべて、それに心理的な公正を要する不動産市場とか株式市場とかは不可能になってくる」(60)

「IV 身体、感覚、意識の経済」

「経済的な欠乏が心理的であるという事実」、「経済のさらなる心理的文脈」、「人間の欲求」(60)

「身体経済」は「感覚経済」に進展する」、「感覚経済」は「意識経済」と呼ぶものに進展する」、「人間の関心は感覚的満足のレベルから知的レベルへと進む」

「追憶の感情を満たすために、私たちはあらゆる種類の記念碑や記念品をつくる」(61)

「唯物論では現代社会の再建の問題は解決できない」、「唯心論的な経済史観」、「ある時代の文化は、物質的な生産・分配・消費の形態を発展させ制御するその時代の人々の意識生活の覚醒度によって、決定される」(63)

「V 資本と労働」

「自然の土地はそのままでは人間の生活には価値を持たない」、「社会的な心理がその価値に作用し始める」(63)

「VI 原始的文化の精神的基礎」

「共通言語」「ギルド」「キリスト教的な友愛関係」(66)

「VII 機械文明史の唯心史観」

「マルクスの唯物史観には根本的な訂正を加える必要を感じる。社会的エネルギーの表象である貨幣の力は、確かに、物質的な事柄とされてよい。人間の貪欲として知られる心理的要因が、考へに入れられねばならない」(67)

「マンモニズムは強欲な自己中心的現実主義を意味する」、「資本主義を純粋に唯物的と考えるのは大きな間違いである。そこに横たわっている心理的側面はずっと重要である。資本主義のシステムは、結局、自己中心的な搾取のシステムにほかならない」(68)

「VIII 宗教的価値と経済的価値の結合」

「生命、労働、変化、成長、選択、秩序、目的という七つのタイプの価値は、人間の意識の発達により発展する」、「客観的世界と主観的世界を連結する七つの通路」、「チャールズ・ダーウィンの進化の世界はこれらの価値の七つのタイプの法則を認めている」

「経済的価値は主観的ならびに客観的価値から分離されたものではない。それはむしろ、人間の意識活動全体の基礎なのである。意識経済を拒否するどんな経済観も、十分ではない」(69)

「共産主義と科学的社会主義はともに、宗教的な概念に関わるある宇宙観を持つ」、「さまざまないズム」「の創始者や賛同者は、それぞれの仕方で、宇宙におけるある種の宗教的価値の形態を追っていることを、見落としてはならない」、「彼らのうちに宗教のある面への類似性を見ることができよう」

「唯物論的経済学と唯心論的経済学」「本質的な違いは」「一方が決定論的宇宙観を選び、他方が可能性への信仰に基づく目的論的見解を選ぶところにある」

「今日のように、人間の意識が目覚めた時代においては、人間の交換行為と人生の目的は分離され得ない」、「私たちの次の段階は」「経済的価値である交換価値を宗教的にしていくこと」、「協力の経済が社会的連帯の意識に基づいていること」、「この機械文明を今一度精神化する力」(70)

5. 「第4章 変革の哲学」

「I 暴力革命」

「暴力革命が、経済革命を遂行することに失敗した七つの理由」(71)

「II 経済革命」

S. Ashina

「人間の意識の革命」「所有権や相続や契約権と関係のある富や職業に関する理念に根本的な革命が生じなければならない。これらの考えの革命が宗教的意識に基礎づけられ、それが社会的意識を構成するまでに発展するときに、経済革命ははじめて完全に実現される」（74）、「真の経済革命は、キリストにおけるごとく、いのちについての目覚めた意識が社会化されるときにのみ達成される」（76）

6. 「第5章 世々を貫く兄弟愛」

「I 愛の実践」

「キリスト教史の最たる特徴は兄弟愛の展開である」、「愛餐の物語」、「愛餐は特に失業した人を助けるために企てられたものであった」「失業者を救済する義務」、「魚とパンの食事」（77）

「II 修道会」

「6世紀以前については詳しくは分からないが、真のキリスト教的兄弟愛を明らかにする修道院との連関で、多くが保護され展開されていたこと」、「現在のセツルメントのような働き」（79）、「いわゆる「暗黒」時代におけるキリスト教の進展の事実は、キリスト教的友愛運動だったキリスト教的労働者ギルドと関係があると考え」（80）

「III ゴシック建築とキリスト教的兄弟愛」「IV 再洗礼派の運動」「V プロテスタント自由主義」

「VI キリスト教的友愛の経済実践」

「キリスト教的友愛の発展史」「ほとんど例外なく、労働は尊重され、金銭への利子は許されなかった」（85）

7. 「第6章 現在の協同組合運動」

「I 開かれたコミュニティを」

「現代の協同組合は、中世の組合（ギルド）の延長線上に改良され発展してきた」、「中世のギルド」「その組織は非組合員にまで兄弟愛を及ぼすことはなかった」、「真の協同組合の基本原則の一つはそのサービスをコミュニティ全体へ広げることである」（87）

「II ロジデール・システム」「III ライファンゼン・システム」「IV 日本における協同組合運動」

「V 強制協同組合」

「収奪の無い計画された経済の体系」、「徹底した教育運動から始めなければならない」、「意識的な自覚と自発的な行動なくしては、協同組合運動は達成されない」（93）

「VI 協同組合運動に対する反対」

「移行のプロセスは、だれにも苦難を及ぼさないよう、極めてゆっくりとしたものとなるだろう」、「資本主義的なやり方から協同組合の方式へと、考え方を変えなければならないのである」（96）

「VII 精神的運動としての協同組合」

「協同組合経営は組合員の宗教的な社会意識の目覚めに依存するであろう」（98）、「友愛意識の復活、キリスト教的兄弟愛の復活」（99）

8. 「第7章 兄弟愛の行動」

「I 多様な互助組織の必要性」

「今日存在するのは資本主義である。資本主義は無限に自然資源がある間はまだよいが、私たちが自然の資源を使い果たしてくると、悲惨と金婚の恐ろしい状態が起こる。そうすると、生活を護り、経済状態を適正に公正に調節していくために、兄弟愛の運動が不可欠となる」(103)

「II 保険協同組合」「III 生産者協同組合」「IV 販売者協同組合」「V 信用協同組合」「VI 共済協同組合」「VII 利用協同組合」「VIII 消費協同組合」

9. 「第8章 協同組合国家」

「I 協同組合国家の精神的基盤」

「友愛意識の覚醒の程度」、「贖罪愛の精神的基盤がない限り、成功の可能性はほとんどない」(128)

「II 協同組合国家」「III 協働組合連盟」「IV 産業議会」「V 社会議会」「VI 内閣」「VII 選挙」「VIII 警察制度」「IX 資本主義から協同組合へ」「X 私有と個人企業」「XI 慈善と教育」

10. 「第9章 友愛に基づく世界平和」

「I 戦争の原因となる経済」

「縮小してゆく地球上で国民間の争いを続けるのは不毛なこと」(148)

「宗教的対立によって惹き起こされた戦争もあった」、「世界平和に対する脅威として現存する状況は大部分が経済的なものである」「人口過剰」「自然資源の欠乏」「国際金融の問題」「貿易政策の摩擦」「輸送政策の摩擦」(149)

「最近の農業不況の原因は、食物の生産過剰によるものであった」、「世界列強がよき隣人国として共に手を結ぶならば、人類が飢えるような事は決してないであろう。誠に残念なことであるが」(150)

「II ロイド海上保険協会を見よ」

「III 協同組合貿易と世界平和」

「国際信用銀行」(154)、「諸国民を教育していく問題に帰着」(155)

「IV 国際経済会議」

「経済連盟」(156)

「V 国際協同組合」

「現在の傾向は、弱い国々の窮乏を利用し、それらの国を足下に踏みにじることにある。これは、個人に対してであれ、国に対してであれ、キリスト教的態度ではない」(158)

「VI 結論」

「猜疑心」「軍備に莫大な支出をしている」、「私たちの意識において経済がまだ精神化されていないからにほかならない」

「経済活動のすべてを、贖罪愛の意識的行為によって浄化し合理化すること」(159)

「世界の経済体制を「協同組合化」する努力をいまず始めよう」(160)